

1. 穀物の個別品目の需給見通し

(1) 小麦

○2015/16年度の小麦需給（予測）のポイント

生産量は、インド、カナダで減少するものの、中国、豪州、ロシア等で増加することから、世界全体では3年連続で史上最高を更新すると見込まれる。

消費量は、中国で飼料用需要の減退に伴い減少するものの、人口の増加、都市化の進展及び所得の上昇等による食料用需要の増加や、EU、ロシア等で飼料用需要の増加が見込まれることから、世界全体では3年連続で史上最高を更新すると見込まれる。

期末在庫量は、生産量が消費量を上回ることから在庫が積み増しされ、期末在庫率も前年度より上昇すると見込まれる。（表 IV-1-①）

表 IV-1-① 世界の小麦需給

（単位：百万トン）

区 分	2011/12	2012/13	2013/14	2014/15	2015/16 (予測)	対前年度 増減率(%)
生産量	696.6	658.3	715.4	725.9	735.4	1.3
消費量	697.5	679.0	698.4	707.2	716.1	1.3
うち飼料用	148.4	138.2	126.7	132.8	138.0	3.9
貿易量	158.2	137.4	165.9	164.4	161.6	▲ 1.7
期末在庫量	197.8	177.0	194.0	212.8	232.0	9.0
期末在庫率	28.4%	26.1%	27.8%	30.1%	32.4%	2.3

資料：USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、「Grain: World Markets and Trade」、「World Agricultural Production」、「PS&D」(January 2016)

注：1) 年度区分は、2015/16年度についてみると、生産量は北半球の2015年産冬小麦(収穫は6月～8月)、同春小麦(同8月～10月)及び南半球の冬小麦(同11月～2016年2月)の計(見込み)であり、消費量、貿易量、期末在庫量は各国市場年度(末)の計(見込み)である。

2) 貿易量とは輸出量を意味する。

3) 期末在庫率の対前年度増減率は前年度とのポイント差である。

ア 生産量

2015/16年度は、インドでは時期はずれの降雨、カナダでは乾燥等の影響により減少するものの、中国、豪州、ロシア等では増加することから、世界全体の生産量は、史上最高であった前年度を更に9.5百万トン(1.3%)上回り、735.4百万トンとなる見込みである。

なお、2015/16年度の世界全体の生産量に占める国・地域別の割合を見てみると、世界第1位のEUが21%、第2位の中国が18%、第3位のインドが12%と、上位3カ国・地域で全体の約半分を占める見込みである。（表 IV-1-①～③、図 IV-1-①）

表 IV-1-② 世界の小麦生産の状況

(単位:百万トン)

区 分	2011/12	2012/13	2013/14	2014/15	2015/16 (予測)	対前年度 増減率(%)	世界に占め る割合(%)
世界合計	696.6	658.3	715.4	725.9	735.4	1.3	100
E U	138.2	133.9	144.6	156.5	158.0	0.9	21
中 国	117.4	121.0	121.9	126.2	130.2	3.2	18
インド	86.9	94.9	93.5	95.9	88.9	▲ 7.2	12
ロシア	56.2	37.7	52.1	59.1	61.0	3.2	8
米国	54.2	61.3	58.1	55.1	55.8	1.3	8
(参考)							
カナダ	25.3	27.2	37.5	29.4	27.6	▲ 6.2	4
ウクライナ	22.3	15.8	22.3	24.8	27.0	9.1	4
豪 州	29.9	22.9	25.3	23.7	26.0	9.9	4
カザフスタン	22.7	9.8	13.9	13.0	14.0	7.7	2

資料: USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、「Grain: World Markets and Trade」、
「World Agricultural Production」、「PS&D」(January 2016)

E Uでは、2015年6月以降の高温乾燥型の天候を受けて一部産地で単収が低下したものの、大部分の産地では生育期間を通じて総じて好天に恵まれ、生産量は前年度より増加(0.9%)し、158.0百万トンと3年連続で史上最高を更新する見込みである。品質については、総じて前年度より良好で、特に、フランス及びドイツでは、容積重とフォーリングナンバーが前年度を上回っているものの、たんぱく含有量は期待されたほど高くないと報告されている。

写真: フランス西部シャラント=マリティーム地方東部
出穂期を経て成熟期に向かう小麦(2015年5月)



写真提供: Serge Brossard氏

写真: ドイツ中部 ザクセン・アンハルト州
収穫間近の小麦(2015年7月)



中国では、生産量の約9割を占める冬小麦の播種作業は2014年9月から11月に行われ、大部分の産地で土壌水分量に恵まれて順調に進展し、その後の生育期間中も総じて温暖型の天候で適期の降雨に恵まれたこと等から、収穫面積及び単収が前年度を上回り、生産量は前年度より増加(3.2%)し、130.2百万トンと、3年連続で史上最高を更新する見込みである。しかしながら、揚子江中・下流域の一部産地では、収穫期を迎えた2015年5月末から6月初旬に大雨に見舞われたことに伴い、品質の低下が報告されている。なお、中国の単収は、2000年以降、灌漑の改良でかなり安定しており、2009/10年度を除

き上昇している。

中国では、2004年以降、食糧価格が低下しすぎた場合には、国有食糧企業（通常は、中国備蓄食糧管理総会社及びその支社）が市場価格より高い最低買付価格で無制限に農民から食糧を買い付ける「最低買付価格政策」を導入している。当初の対象品目は米のみであったが、2006年以降は小麦もその対象に加えられた。2015/16年度については、2014年10月、国家発展改革委員会（NDRC）は、2015年に収穫される3等小麦の50キログラム当たりの最低買付価格を、前年同の118元（2,360元/トン）に据え置いた。

写真：中国華東地区 安徽省亳州市（2枚とも）

分けつ期を迎えた冬小麦（2014年12月）



成熟期を迎える冬小麦（2015年5月）



写真提供：アイ・シー・ネット（株）（2枚とも）

インドでは、2014年のモンスーン期到来の遅れに伴う前作である米の収穫遅延により、播種作業の開始が遅れたものの、2014年12月の降雨を受けてその遅れを取り戻して2015年2月には終了し、播種面積は前年度を上回った。しかし、主産地である北部の一部産地では、登熟期～収穫期を迎えていた2015年2～3月に時期はずれの降雨に見舞われ、特にウッタル・プラデーシュ州北西部、ハリヤナ州南東部では収穫遅延や単収・品質の低下等の被害が発生したため、生産量は、前年度より減少（▲7.2%）し、88.9百万トンとなる見込みである。

インド政府は、公的分配制度に基づき、生産者から最低支持価格^(※)での小麦の買い上げを実施している。2015/16年度の最低支持価格については、2014年10月、100キログラム当たり前年度を50ルピー上回る1,450ルピーに決定された。なお、2015/16年度の政府買入れは2015年7月に終了し、悪天候による品質悪化を受けて2015/16年度における小麦買入れの品質基準を緩和したこと等により、生産量は前年度を下回ったものの買入数量は28.1百万トンと前年度（28.0百万トン）を上回った。

^(※) 最低支持価格（Minimum Support Price, MSP）

インドでは、1960年代半ば以降、低所得者層や社会的弱者への食料安全保障の提供等を目的とした公的分配制度（Public Distribution System, PDS）を構築。インド食料公社（Food Cooperation of India, FCI）は、生産費、買上必要量、需給状況等を考慮して農業費用価格委員会が設定した買取価格の勧告を受けて、最低支持価格（MSP）を決定し、生産者から同価格で買い上げる（買上数量は上限なし）。

写真：インド北部 ラジャスタン州
分げつ期を迎えた小麦畑（2015年2月）



写真：インド北部 ハリヤナ州
登熟期を迎えた小麦畑（2015年3月）



写真提供：Agriwatch Research Team（2枚とも）

ロシアでは、2014年秋の乾燥により冬小麦の発芽や生育が阻害されたこと等から単収が低下したものの、冬小麦及び春小麦ともに播種面積が増加したこと等から、生産量は前年度より増加（3.2%）し、61.0百万トンと史上最高の前年度を更に上回る見込みである。

写真：ロシア南部連邦管区 ボルゴグラード州（2枚とも）

土壤水分不足のため発芽にむらがあるほ場
（2014年9月）



完熟期を迎える冬小麦
（2015年7月）



米国では、冬小麦の生産量が減少するものの、春小麦及びデュラム小麦が増加することから、生産量は前年度より増加（1.3%）し、55.8百万トンとなる見込みである。冬小麦は、播種作業の遅延等により播種面積が前年度を下回り、大平原南部の一部での2015年4～5月の降雨過多による病害の発生及び品質の低下等から、生産量は前年度より減少（▲0.5%）し、37.3百万トンとなる見込みである。春小麦及びデュラム小麦は、播種時期に主産地の北部で適期の降雨に恵まれて播種面積が前年度を上回るとともに、発芽、出穂も前年度及び5ヶ年平均を上回るペースで進展し、収穫作業も高温乾燥型の天候に伴い順調に進展したことから、生産量は前年度より増加し、春小麦は16.3百万トン（前年度比0.7%増）、デュラム小麦は2.2百万トン（同52.6%増）となる見込みである。

写真：米国中西部 インディアナ州（2015年3月）
積雪(スノーカバー)が薄くてまばらな冬小麦畑



写真提供：Dr. Neal Blue, Consultant, Columbus, OH

写真：米国中西部 ウィスコンシン州
成熟期を迎える冬小麦（2015年6月）



Tina and Duane Hinchley 氏

カナダでは、春小麦、デュラム小麦、冬小麦ともに減少することから、生産量は前年度から引き続き減少（▲6.2%）し、27.6百万トンとなる見込みである。春小麦やデュラム小麦は、播種時期に前年度のような低温や大雨による洪水被害がなかったこと等から播種面積は前年度を上回った。しかしながら、主産地のプレーリー（アルバータ州南東部からマニトバ州南西部の平原）でシーズン初めに非常に乾燥した状態が続いたため、その後の降雨や収穫時期の温暖乾燥型の天候によりシーズン後半に作柄が幾分改善したものの単収は前年度を下回り、春小麦の生産量は20.0百万トン（対前年度比6.3%減）、デュラム小麦は5.4百万トン（同3.8%減）となる見込みである。また、冬小麦は、前作の大豆の収穫が遅れたため遅延して播種面積が前年度を下回るとともに、春から初夏にかけての乾燥型の天候により一部の産地で作柄が悪化し、単収が低下することから、生産量は2.2百万トン（前年度比23.4%減）となる見込みである。

カナダ農務農産食品省「Outlook for principal field crops, November 2015」（2015.12.18）によれば、品質については、春小麦、デュラム小麦ともに前年度を上回り、たんぱく含有量の平均は、春小麦（CWRS）が14.1%（前年度13.4%、過去10年平均13.5%）、デュラム小麦が14%（同12.8%、同12.8%）となっている。

写真：カナダ アルバータ州（2014年7月）
乾燥型の天候が続く中、出穂した春小麦畑



写真提供：Gerry Good 氏（2枚とも）

写真：カナダ サスカチュワン州（2014年10月）
9月の雨で遅れた収穫が急ピッチで進める様子



ウクライナでは、生産量の9割以上を占める冬小麦は、播種時期に温暖で土壌水分量も十分となった